

承継23号 2003/夏・秋



目 次

1	点描	野 間 美喜子	2
2	特定非営利活動法人 平和のための戦争メモリアルセンター設立準備会 2003年度事業計画書		4
3	2003年度 特定非営利活動に係る事業会計収支予算書.....		5
4	【平和のための戦争メモリアルセンター設立準備会 NPO設立記念講演会】 「無言館」のこと	窪 島 誠一郎	6
5	アメリカ軍の民家空襲体験 幼年時代	庄 司 達	21
6	シベリヤ抑留の想いで(三)	竹 下 重 人	24
	表紙画	絵手紙展より	
	題 字	村 上 広 龍	

点 描

第一回総会ご報告

野 間 美喜子

本年四月、NPO平和のための戦争メモリアルセンター設立準備会は、予定通り認証され、無事に発足した。準備を始めてほぼ一年、申請から認証まで四ヶ月を経過した。設立登記を済ませ、ホツとする間もなく、わが会は心せわしい日々を迎えた。六月二一日に予定した第一回総会の企画をたてなければ……、その前に理事会もやらねば……、会員の拡大も計らなければならぬし……。何かにつけて、これまでと違ってきちんとやらねばというプレッシャーも加わった。

それでも何とか事がうまく運ぶから有り難い。こういうときは必ず事務局のメンバーが底力を発揮してくれる。

四月一九日の理事会には、NPOの運営に詳しい大西光夫さん（ボランティアネイバーズ理事長）が「NPO発展のための課題」というテーマでお話をしてくださいることになり、第一回総会には無言館の館主の窪島誠一郎

さんの来演の承諾をとりつけることができ、活動は一気に軌道にのった。

総会と記念講演会は、使用料のいらぬNPO交流プラザの一番大きい部屋を借りることになったが、定員が八〇名だという。どのくらいPRすれば八〇人くらいの人に来てくれるのか、まず見当がつかない。少な過ぎでは困るし、多すぎても困る。この予測が大変むづかしいのだ。皆で知恵をしぼって、なかなかよく出来たチラシができ、二〇〇枚を市内各所に配ったが、これで人が来てくれるのかどうかは皆目判らない。たまたま別件でNHKラジオの記者から電話があったので、幸いとばかり、この企画をラジオで報道してほしいと頼んだら、OKしてくれて、お報せ番組で紹介された。中日新聞も記事を書いてくれた。総会の四、五日前のことである。

翌日から、問い合わせの電話がひっきりなく事務所にかり始めた。始めは嬉しく対応していたが、そのうちだんだん心配になった。せっかく来てくださっても会場に入りきれないのではないか、それでは失礼だ、どうしたものだろ、事務局は、次々かかる電話を受けながら、

総会当日まで悩みつづけた。

総会当日は、梅雨の間とは思えない青空のカラリと晴れた日になった。一時半の総会がまだ始まる前からお客様が来始めた。用意した番号札を渡してお待ちいただき、定刻より総会を開催した。出席者四五名（うち委任状一八名）で、総会は有効に成立し、塩澤先生の情勢報告を含めたご挨拶のあと、田中十四子理事が議長に選出され、議事に入った。議案は、二〇〇三年度事業計画案と同収支予算案についての二つであり、事務局提案を説明し、若干の質疑のあと異議なく承認された。（本号四、五頁に掲載）

総会が終ったころ、会場の周りは講演会の開催を待つ人たちが一杯になった。詰めて、詰めて、どんどん詰めて椅子を入れ、会場は一度入ったら二度と出られないほど一杯になり、窪島さんの講演は始まった。定員をはるかに越えていたが、NPOプラザの担当者は親切に次々と椅子を貸して下さり、大変ありがたかった。入れないからとお断りすることもなく、百数十人が詰めあつて講演を聴くことができた。

お話は感動的であり、決して聞く者も多く、充実した記念講演会となった。テープを起して、本号にそのまま掲載したのでお読みください。事務局の田村郁子さんが老眼にムチ打って作業してくれたものである。

NPO平和のための戦争メモリアルセンター設立準備会のリーフレットもできた。秋には、無言館へのバスツアーも計画中である。運動は前進モードにある。この点描は、今後は事務局メンバーが回り持ちで書くことになった。運動を支える人たちの息吹が伝わるコラムになることと思う。



第1回理事会（平成15年4月19日）

特定非営利活動法人
平和のための戦争メモリアルセンター設立準備会

2003年度事業計画書

1 事業実施の方針

平和のための戦争メモリアルセンター(戦争資料館)設立にむけた県民世論の喚起とそのための諸事業に取り組む。

2 事業の実施に関する事項

(1) 特定非営利活動に係る事業

ア 第1回総会記念集会

(ア) 事業内容 窪島誠一郎講演会(演題「無言館のこと」)の開催

(イ) 実施日時 2003年6月21日

(ウ) 実施場所 名古屋市中区三の丸三丁目2番1号

あいちNPO交流プラザ

(エ) 従事者の予定人数 約10名

(オ) 受益対象者の範囲及び予定人数 愛知及び近県の県民約80名

(カ) 収入見込み額 0円(参加費無料)

(キ) 支出見込み額 15万円(講師謝礼・交通費)

イ 機関誌「承継」の発行・頒布事業

(ア) 事業内容 平和推進と戦争資料館設立を趣旨・内容とした機関誌「承継」の発行・頒布

(イ) 発行予定日時 2003年 夏号(8月) 2004年 冬号(2月)

(ウ) 発行予定場所 野間法律事務所

(エ) 従事者の予定人数 約10名

(オ) 受益対象者の範囲及び予定人数

一般県民 約500~1000名の予定

(カ) 収入見込み額 なし

(キ) 支出見込み額 60万円(印刷代及び郵送費)

2003年度 特定非営利活動に係る事業会計収支予算書

2003年4月1日から2004年3月31日まで

特定非営利活動法人 平和のための戦争メモリアルセンター設立準備会

(単位：円)

科 目	金		額	適 用 備 考
経常収入の部				
1 会費収入				
(正 会 員) 会費	450,000			年額6000円 × 75人
(賛助会員) 会費	450,000	900,000		年額3000円 × 150人
2 事業収入				
集会等事業収入	0			
その他の事業収入	0	0		
3 寄付金等其他収入	100,000	100,000		
経常収入合計			1,000,000	
経常支出の部				
1 事業費				
集会等事業費	200,000			講師代等
機関紙発行事業費	600,000			年2回 × 30万円
その他事業費	0	800,000		
2 管理費				
役員報酬	0			
給料手当	0			
会場費	35,000			
通信・郵送費	30,000			電話代・郵送代
印刷費	80,000			資料等印刷費
交通費	0			(コピー代含む)
雑費	25,000	170,000		
経常支出合計			970,000	
経常収支差額			30,000	
その他資金収入の部				
1 その他収入	0	0		
その他資金収入合計			0	
その他資金支出の部				
1 その他支出	0	0		
2 予備費	30,000	30,000		
その他資金支出合計			30,000	
当期収支差額			0	
次期繰越収支差額			0	

二〇〇三年六月二十一日

【平和のための戦争メモリアルセンター設立準備会NPO設立記念講演会】

「無言館」のこと

「無言館」「信濃テッサン館」館主・作家

窪島誠一郎

ご紹介いただきました窪島です。

日頃美大や芸術系の大学でお話する機会はあるのですが、平和とか戦争とか云う口当りの良い言葉を加味した



つどいと言つのは、好きではありません。何だか良く解らないけど、体の奥底にある種の拒否反応があります。今回は、私

の立場からの自由な話をして欲しいとの非常に熱いお手紙をいただきましたので、みなさんの取り組まれている活動の何たるかも知らずに、ここへ来た次第です。見当はずれのお話をするときは、お許し下さい。

私は、長野県の人口一百万ほどの上田市の町はずれで二つの美術館を経営しております。一つは、信濃テッサン館で、昭和五四年六月に開館して今年で二五年目です。信濃テッサン館が一九年目を迎えた時、信濃テッサン館から七・八〇〇m東側のところに、戦没学生慰霊美術館、無言館を分館として開館しました。

現在日本には、一〇〇〇から一五〇〇館ほどの美術館があり、国立から村立まで、国や地方自治体が美術館をつくるという時代がやってきています。数多くの美術館の中で、私の経営しています信濃デッサン館、無言館はいづれも全くの個人経営の美術館です。私立美術館と云うよりは、個人商店美術館と云った方が良いのかもしれませんが、公的援助や助成金、税優遇など全く受けず、個人の手で営んでいる、全国数ある美術館でもとてもまれな存在のような気が致します。

信濃デッサン館は大正時代、あるいは戦前戦後の貧しいどん底の生活の中で、肺結核や栄養失調にかかり、食べるものも食べられないでただただ絵を描き続けた、二〇数歳までのきわめて若い命しか与えられなかった絵かきたち。そうした天折画家、早世画家の絵ばかりを集めています。年間の来館者は、一万五千から三万人位で、個人で経営している美術館としてはよく頑張っている方です。ちなみに名古屋市立美術館は、八万から一〇万の間を推移しているということなので、三万人いらっしゃるのは胸を張っていい成績かと思うのです。

私の美術館が二五年間なんとかやってこられたのは、地の利と言うか、信州上田の歴史風土の豊かさ、信濃の景観の美しさが大きく味方しています。東京からは新幹線で上田まで来ますが、そこから一時間に一本の単線

電車で無人駅の塩田町で降り、そこから女の人なら一時間位かかるところにあります。そんな交通不便なところにあります。浅間山、菅平、南アルプスが遠くに霞んでいて、東信州の大変美しい景観なのです。海拔六七〇mの独鈷山の山合に真言宗前山寺と言う千年を超える時暦を重ねた美しい苔色をしたお寺があります。

この前山寺に抱きかかえられるようにして建っているのが私の美術館です。信州の歴史風土の深さ、景観の美



しさが、私の二五年を支えてくれた気がするのです。

ただ、それだけではない。もう一つの要因は、大正時代、戦前戦後、肺結核や栄養失調など、貧困のどん底でただひたすら絵を描き続け、生きていた年月から大好きだった絵を描くことを引き算したら、もうあとには何も残らない人生。そんな若い絵描きたちが生きた命の熱さ、情熱の余熱とでも言うものが、今生きる私たちの心をどこかでノックして、ゆさぶって、遠い信州の山合の私たちの美術館に来て下さる大きな力になっているのではなにかと思っっているのです。

信濃デッサン館の大事にしている絵描きさんを一人だけご紹介しておきます。

村山槐多。本籍は愛知県岡崎市で、明治二九（一八九六）年に神奈川県で生まれました。京都府立一中に通った一五歳のころから天賦の才能が開花します。一五歳からたて続けに日本美術院賞を受賞し史上最年少で多くの賞を一人占めました。絵を描くことのみでなく、詩や小説を書き、短歌、俳句をよみオカリナの作曲もしまし

た。「京の都に槐多あり」と言われるほどでした。大御所の横山大観をして「筆を折らなければならぬかもしれぬ」となげかせたほど、槐多の絵の才能は高く評価されていました。槐多のいとこに当る人に山本鼎さんという人がおりました。ただ富士山を模写して描いているような当時の日本の児童画に、子どもたちなりの感性を育てようと言う自由画教育運動を起こしたことで、山本鼎は有名です。一四歳違いの山本鼎は、当時フランスに留学中でしたが、送られてくる槐多の絵の才能にびっくりしました。そして鼎は、槐多が絵描きになることに大変協力し、応援します。なんとか絵描きにしてやってくれと、両親に手紙を書いて送る。ところが、お父さんお母さんはコチコチの学校の先生で、絵描きになるということは一生貧乏を約束されたことだと大反対でした。槐多は一七歳で両親のもとを出奔し、飛騨山脈を越えます。手の中に埋まってしまいうような短いエンピツと、新聞の広告チラシをとじた手製のスケッチブックを持って、信州上田へ向きます。上田郊外で、お父さんの兄の山本一郎さんがお医者さんをやっていたので、山本鼎の紹介状

を持って行きました。そして数多くの信州の絵を残しました。浅間山、千曲川、茅葺屋根やお百姓さん。

そんな槐多に一八才のとき、肺結核がおそったのでした。大正半ばから昭和のはじめにかけて、二六万人の命をうばったスペイン風邪が流行りましたが、槐多は洗面器に血をはきながら、最後まで鉛筆をはなそうとはしませんでした。そのころは代々木八幡神社の火の見櫓の下のおばらや、鐘下山房で絵をかいていました。亡くなった日の朝、槐多を案じるたくさんの仲間たち、山本鼎、芥川龍之介、島崎藤村等が見舞に来ます。しかしふんはもめけのカラでした。槐多は四〇度以上の熱の中、発作的に素裸になり、小さなエンピツと広告をとじたスケッチブックを持って、戸外へとび出して行っていました。友達たちが探しましたが、大正八年二月二〇日の未明、発見された時にはほとんど絶命していました。二二歳五ヶ月という生涯でした。

槐多は亡くなる直前「祈り」と言う詩を残しています。

神さまあと一日の命を私にお与え下さい

あと一日生きるといことは、いかなるクレオパトラの光にもまさりませぬ

あと一日生きるといことのためならば

一生女の人の体にふれると言われれば、その約束も守りましょう

神さまあと一日私を生かして下さい

あと一日生きてさえいれば山がかける 川がかける
木がかける 又、あしたもあのスケッチが続けられる

亡くなった翌々年の大正一〇年北原白秋、山本鼎の手によって、「槐多（の）うたえる」と言う詩画集が出版されますが、この冒頭に「祈り」がかかげられています。

槐多が二年の生涯の中で残した絵は、白川公園にある名古屋市美術館の「房州風景」 国立近代美術館の「バラと少女」を含めても油絵はわずか二〇点、デッサンは八〇点前後と言われています。

私の信濃デッサン館には四一点、日本で一番多く村山槐多の絵が展示されています。一九歳の時の「ばらと少女」という作品が生前残した中で一番大きな絵です。

おさげ髪の少女のうしろには、無数のバラが咲いています。夕やけか朝やけの、まっ赤な空が「ガラン」という深紅色の絵の具を使って、ほっぺがまっ赤、こぶしがまっ赤、ばらの花がまっ赤。絵をみていると、こちら側までがひっぱり込まれそうな絵です。

さてこの信濃デッサン館の分館として平成九年五月に、戦没画学生慰霊美術館「無言館」を開館いたしました。

こちらの方には年間一〇万人から一万人の方々がいらっしやいます。

太平洋戦争、さかのぼって、日中戦争、ロシアとの戦争など日本はいくつもの戦争をのりこえてきたことは周知のとおりです。たくさんの兵隊さんが亡くなって三百万何十万人ともつかない尊い命が戦中に消えました。当然のことですけれども、亡くなった兵隊さんの中には生きて帰ったら絵描きになりたいと絵描きを志して、戦地で亡くなった画学生さんたちが含まれていました。私が、戦地で亡くなった学生さんの存在を心でしっかり認識し

たのは、「祈りの画集」という画集からでした。記憶にまちがいがなければ、昭和五二年夏頃NHK日本放送出版協会から出版されたものです。

昭和五二年は、長野県上田に槐多の絵を追いかける旅をして、その道すがら前山寺のご住職と知り合いました。この年の春、風光明媚な土地で、室町の初めに出来た三重の塔の傍らに、美術館を建設する予定地をお寺からお借りした時期でした。寺の六〇〇坪を借りる話がまとまって、東京と信州上田を行ったりきたりしていました。そんな時、東京御徒町の本屋でこの本を手にとりました。信越線に乗って画集をペラペラめくってみていました。最初はさほど感銘はつけませんでした。

「祈りの画集」は東京美術学校、現在の東京芸大に在籍していて戦地にかり出され、帰ってこられなかった人の絵を集めたものでした。どれもが未熟というか未完成で、芸術的にも納得するものではないと、当時の私の目にはそう思えました。学業半ばで出兵した彼らの絵が未熟であったと私にみえたのも当然だったかも知れませんが、ただ私はその時「祈りの画集」を作った絵描きさん

に興味をもちました。その絵描きさんは野見山暁治さんで、現在八二才になられます。当時は東京芸大の主任教授をなさっておられました。この方が、戦地で亡くなった方のご遺族の家々を、NHKのカメラマンと一緒に訪ね歩いて、作った本が「祈りの画集」でした。

昭和五二年当時、画学生さんのお父さんお母さんの大半はご存命でした。野見山さんは昭和一三年に東京美術学校に入学し、胸をわずらって一年留年。昭和一七年九月に繰り上げ卒業のあと、昭和一八年満洲牡丹江へ出征しましたが、すぐ肋膜炎になって入院し、昭和一九年二月に内地送還されて、生きて帰っていらっしやうた。しかし、先輩、後輩、仲間たちが戦地で亡くなった。生きて帰った野見山さんが、亡くなった人の家々を訪ねて歩く。画集の絵からは私はさほど感動といったものを覚えませんでした。この本を編纂された野見山暁治という方は「とつてもしんどくて、つらい仕事をなさったなあ」と言うのが私の感想でした。野見山さんのご本に「四〇〇字のデッサン」というご本があります。この中に、家々を訪ねた時の思い出がしるされています。その中で関西

のご遺族の方を訪ねた時の思い出がこんな風に書かれています。

写真をとつてすべての仕事が完了して帰り仕度をした野見山さんが玄関まで出てくる。亡くなった同級生の七九歳のお母さんが、野見山さんの背にコートをかけてくれた。「亡くなった仲間の母親の手がコート越しに幾度もいくども自分の背中をなげるのを感じた。母親のしわばんだ老いた手が、コート越しに幾度もいくども、何かを確かめるように自分の背中を撫でていく、そのコート越しに撫ぜる母親の手がまるで焼きゴテのように熱く感じられた」「生きていたら我が子もあなたと同じように絵をかいていただろう。生きていけば、我が子もあなたと同じように活躍していたかもしれない」と書いておられる。この思い出は何もこのときだけではなかつたらうと私は想像します。行く先々で野見山さんは、厳しいともやるせないともつかないご遺族の眼差しをあびなければならなかつただらうと想像するのです。

昭和五四年六月に信濃デッサン館が開館しました。

朝日新聞に「地方個人美術館の夜明け」と言う記事が書

かれました。当時私はロンドンに追いたてられやりくりが大変な日々でしたので、「祈りの画集」はその後本箱のスミに眠ったままになっていました。

さて、私の美術館には「槐多忌」という大きなイベントがあります。開館一年めから開催されてきたもので、今年はその第二四回が開かれましたが、ゲストの話聞き、村山槐多の二二年の生涯をしのび、全国のファンが集まって語り明かすつどいです。ゲストのお話を聞き終えて、夕ぐれのとばりが降りてきた頃、信濃デッサン館の前庭のお寺の山道の脇で、大きな焚き火がたかれます。二月の下旬の寒い雪の中で、野沢菜をつまみ、槐多汁（とん汁）をすくりにながら、見も知らない人たちが、歓談のひとつときを持ちます。

その第一五回の槐多忌に、ゲストとして野見山晧治さんともう一人、槐多の親戚に当たる黒柳徹子さんをお招きしていました。当日は混雑するだろうから、前日にきていただくようお願いをしました。野見山さんにお会いするのはその時が初めてでした。有名な方でしたし、今

では文化功労者に推挙され、抽象画の世界では第一人者の巨匠です。その夜別所温泉にお泊りいただき、私にとっては、野見山さんとダイヤモンドのようなかけがえのない時間をすごさせていただきました。

話が半ば位になった時、私はバックの中から「祈りの画集」をひっぱり出して、「一〇数年前に買って大変大事にしています。感動いたしました。」とそういうふうにし上げました。

野見山さんは「うれしいなあ。ただ残念ながら時間と予算の都合で、訪ねられなかった仲間のところもあり、とても心残りのまま終わってしまった仕事なんだよ」とおっしゃいました。そして「自分がNHKのカメラマンと旅をした頃、まだ仲間たちのお父さんお母さんご兄弟も生きていらっしやった。しかし今ではもうご両親もご兄弟の多くも鬼籍に入ってしまったことだろう。あの当時ですら、もうボロボロに痛んでいた彼等の絵が、今どうなっているだろうと思うと気が気じゃなくてねえ。」そういうふうにおっしゃいました。

その時、その言葉はとてもストレートに私の心にひび

いたのです。単純に「こんなエライ先生になっても戦死した仲間のことは忘れていないんだ」素朴にそんなことを感じました。

その夜、野見山さんはたくさんのお話を話してくれました。昭和一九年内地に送り還される時、牡丹江の駅にたくさん仲間が見送りに来てくれた。列車のガラスをこぶしでたたいて、「生きてかえったら思う存分絵が描ける野見山がうらやましいよ」と言ったその言葉を今も忘れられない。ソ連と満洲の国境沿いのまっ暗やみの山をすぎると、山と山との間の谷間の底に、ガラスの粉をまいたような民家の明りが見える。その民家の明りが、まるで残してきた仲間たちの命のあかりのように見えたとおっしゃいました。

それから三週間後、槐多忌の後始末を終えてから、私は東京練馬の野見山さんのお宅をお訪ねしました。

「先生助手席に乗って下さい。行きそびれた仲間たちの家にもう一度行きましょう、今だったらまだ間に合うかもしれません。」と申し上げたのです。

その時私は五二歳で、先生よりもまだ二まわりも若か

ったのですが、ものすごくコワイ顔をして怒られました。

「キミは自分の言っている言葉に責任が持てるのか。あの当時NHKのスタッフですら、全国に散らばる亡くなった仲間の所在地を探すのは大変だった。戦時中の学籍簿は全くあてにならない。ましてあれから一〇数年過ぎた今、遺族の所在を探すこと、絵を探すことは並大抵ではないだろう。なぜそんなことをやらなければいけないのか。売名か、エーかつこしいか、パフォーマンスか！」

それはそれははげしい口調で、野見山さんは私を叱責されました。「第一、君には戦争体験なんかないだろう、僕はあの美校で、絵描きになろうと将来を誓った仲間たちが死んだんだ。彼等の絵を追い求める義務がある、責任がある。しかし君にはそんなものは全くないはずだ。君には彼等とはみんな赤の他人だ、なぜそんなことをしなければいけないのか。君は自分の言っている言葉の意味が判っていないんだ」

その晩は、よく眠れなかったことを覚えています。

その後、私は野見山さんに長い手紙をかきました。夜

遅く長い電話をいたしました。結果的にそれから四カ月後に私のしつこさにカプトぬいだというのでしょうか、「そつまで言つのなら君と行こう。どれだけ絵が集まるか判らないけれど、もう一度君と行ってみよう」とおっしゃっていただきました。今から八年半ほど前です。

二人の二人三脚の旅が始まりました。

今でも私はあの時の本当の私の気持は何だったのだろうと、時々自分に問います。正直なところ、こうして話す時は理屈を考え、すじ立って話そうと心がけますから、みなさんの耳には理屈立って届くかと思いますが、本当のことを言いますと、あの時の自分の気持がよく判らない時があるのです。ただあの時私が、あゝまでしつこく「先生行きましょう。僕が運転します」と言った時、もし私が考えていたことがあったとすれば、その一つのことだけは、みなさんに聞いていただくことができると思うのです。それは、自分が生きてきた五〇年のことでした。

私は昭和一六年（一九四一）年一月二〇日生まれで六二歳になるうとしています。日本がおろかな戦争にす

べり込んでいく、約三週間前に東京の東中野で生まれました。

訳あって三才の時、生みの両親の元を離れて、窪島茂・はつと言つ両親の元に戸籍上の実子として、もらい受けられました。その頃この夫婦は学生相手の靴の修理屋を営んでいました。

私たち親子が宮城県石巻に疎界して帰ってきた昭和二〇年九月、明大前一带は一面の焼け野原でした。親子三人で家のあったとおぼしき処に佇んでおりましたら、アイスクャンデーやが通り、父親がキャンデーを買ってくれました。私がいしゃがんでしゃぶっている内にキャンデーは串からポロリおちて土の上を転がりました。すかさず母親がそれを拾い上げ自分の口に入れ、きれいにしてもう一度私の口の中に入れてくれました。六〇歳を超えた今も、あの母親のくれたキャンデーの味をはつきり思い出すことができます。そのころに、家族の夕食になるはずだった、サッカーカズルチンの入ったお汁粉を、外から走り込んできた私が、誤って全部ぶちまけてしまったことがありました。勿論父親からはなぐり飛ばされ

てシクシク泣いておりました。母親は、こぼれたあずきを手のひらですくって、一杯分の椀を作って私のところへ持ってきてくれました。そのお汁粉をたべた日のことを今もはつきり思い出すことができます。あの晩両親は何も食べないで床に就いたのだらうと思うんです。

私にも戦争の記憶はあったのです。しかし、それならお前はどれほど戦争から傷を負ったか、どれほどつらい目にあい、体から血を流したり心から血を流したことがあるか、と問われたら返す言葉がないのです。苦労したとすれば両親でした。焼夷弾の降る夜は私の体を防空ずきんに入れて、防空壕で寝かせてくれました。自分たちは何もたべなくても、私には脱脂粉乳のミルクやパンを与えてくれて、私は大きな体格の子に育つことができました。

戦争は両親のシルエットのむこう側にありました。

私は青春期を迎えたころ、高等学校一年で中退して東京渋谷にある生地屋の店員になっていました。二一歳になった時、生地屋をやめて、甲州街道際の、それまで両親が寝ていたバラックを壊し、小さな飲み屋を開業しま

した。昭和三九年一月一日東京オリンピックが招聘される約一年前のことでした。何もかもが右肩あがりで高度成長の頃でした。何かうねりのような怒涛のような上昇志向の経済の流れになってきました。

巾五mがやっとだった甲州街道ですが、中央高速道路と首都高速道路が山梨県まで届くようになりました。

東京オリンピックのとき、私の店の前をエチオピアから来たアベベ選手と、自衛隊の円谷幸吉選手が走りました。沿道にマラソン見物が、六〇万から八〇万もの人がおしよせたと新聞にあったのを記憶しています。

私は夜なべ仕事でオニギリを作って沿道の見物人に売りました。一五〇円から二五〇円で自転車の荷台にくくりつけて、明大前から新宿追分南口の間、笹塚駅のところではほとんどのオニギリを売りつくしました。当時会社でもらっていたお給料が五五〇〇円だったあの時代、オニギリだけの売り上げが一日二万円を突破した日のことをはつきり思い出すことができます。この世は金だと思えました。何もかもが金で決着がつくと思えました。

美術館を作ったのも、あの高成長の世渡りの一環のよ

うな気がします。モノ、カネ主義がしみついた自分があまりに悲しいから、一方で心だの芸術だのと言ってパランスを取っている自分のずるさが見えます。あの時身についた自分の価値観は、もはや消しようがないほど私の体をうめているとしか思えないのです。

良い家に住みたい、良い服を着たい、冷暖房つきの車に乗りたい、有名人になって一旗あげたい。そんなことばかりを考えてきた五〇年でした。

野見山先生から「亡くなった仲間たちの絵が今どうなっているかと思うと気が気ではない」という言葉を聞いた時、私がふと思い起こしたことは、それから十数年前八九歳で亡くなった窪島茂と八三歳で世を去ったはつのことでした。私の両親は貧しかったけれど、とても優しい人たちでした。でも、大学の靴の修理から戻ってきて食事をしながらこぼす愚痴を聞くのが、私は本当に嫌でした。

「誠ちゃんを学校にあげられなかったのは、空襲のせいや。戦争さえなかったら、誠ちゃんを大学まであげられたんだ」口癖のようにこぼす愚痴を、時として殺した

いほどの気持ちで聞きました。「あんなたちは貧乏を全部戦争のせいにする。あの戦争でひと儲けた人がこの世ではたくさんいるんだ。不器用なんだよ。だから金がつかめないんだよ」子どもでしたから、そんなに整頓された言葉でののしった覚えはありませんが、空襲や戦争の話をするたびに耳をふさいで横を向く子どもを見て窪島茂もはつも悲しかったらうと思うのです。

野見山さんと二人三脚の旅が始まりました。

北は北海道江別市、南は九州鹿児島県種子島まで、途中で野見山先生は展覧会の準備が始まり、あとは私一人で廻つたら良いとバトンタッチされ、残りの三分の二近くのご遺族は、私一人で歩きました。

行く先々で、生きて帰ったら絵描きになりたいと思いつながら、それを果たすことなく亡くなっていった方のご遺族と、戦後の風雪の中、大事に守られてきた作品に会い、たくさんのお話を学び、教えられた気がします。

かけ足ですが、何人か画学生のご紹介しておきます。鹿児島県種子島宇宙センターのある町、当時は南種

村と言った村から出た画学生日高安典さんは二六歳で亡くなりました。

出征する直前までモデルを勤めてくれた恋人の絵を描き続けていました。その日のことを弟さんの稔典さんがはつきり覚えていられます。外では出征兵士を送るパンザイと日の丸の旗がふられていて、歓送会でわかかえつていました。「兄貴、みなさんがお待ちかねだぞ！」と声をかけると、「あと五分あと十分この絵を描かせておいてくれ」と云い、恋人には「生きて帰ったら必ずこの絵の続きを描くから」と言い残して戦地へ立つのですが、帰ってきませんでした。そして、このキャンパスの裏に「小生は生きて帰らねばなりません。絵を描くために」と書かれていました。

静岡県浜松から出た画学生中村萬平さん。

終戦一年前満洲の武川で二六歳で戦死します。学生結婚をしていた霜子さんのお腹に赤ちゃんを宿していて、生まれてくるわが子の顔も知らず、霜子さんも出産半月後に亡くなります。萬平さんは亡くなる半年前に、軍事郵便で赤ちゃんの寝顔を描いたデッサンを、昭和一六年

生まれの息子、暁介さんのもとに送ってきています。未だ顔をみたことのない息子、その顔が今の六〇数歳になる暁介さんの顔とそっくりなのです。ただ似ているだけではなく、その赤ちゃんの顔が人間の命のきらめきと云うか、健やかさというか、寝息のすやかさまでが絵をみているこちら側に届きそうなデッサンなのです。

当時軍事郵便は、検閲が厳しかった。しかし不思議なことに絵だけは別だったのです。

なぜかと言うと、一輪の花の絵は、人間の心のスクリーンに写って、始めて一輪の花になるからです。人の心のスクリーンまで検閲することは不可能だったのです。絵というものは、千語万語の言葉以上に人間にとって、かけがえのないコミュニケーションの伝達手段であることをこのことは語っているような気がします。

北九州市の小倉で、去年四月八日に八五歳で佐久間静子さんが亡くなりました。静子さんは大恋愛の末に結ばれた佐久間修さんの絵と共に、戦後の五〇年を越えてきました。佐久間修さんは勤労働員のさなか、長崎の航空廠でB 29に狙撃され二九歳で命を落とします。その一月

まえ、「モデルになってくれと頼むので、私は嫌だったけど始めてモデルを勤めたのです」と静子さんは言われます。初々しい二才当時の静子さんの裸体画のデッサン。ちよつとおしやまな正面からの着物着た油絵。この二点を遺言のように残して佐久間修さんは亡くなりま

す。この静子さんには大変苦勞させられました。絵を手放すと言うので、小倉までいくと、「自分が死ぬ時に棺の中に入れて焼いてほしいので渡せない」といわれて、帰ってくるかと、「渡したい」と言われて、又出かけると、また気が変わると、とうとう四回も小倉まで通いました。

最初は無言館という美術館をつくる気は、全くありませんでした。信濃デッサン館の一隅に、戦地で亡くなった学生さんのコーナーを作って日替り、月替りで紹介していくとうとうそれ位の気持でした。ただ、全国を歩いていく内にだんだん気持が変わってきました。なぜか、彼等の絵には共通して一つのことを言えたからです。

画学生さんの絵には「絵が描けてうれしい」という声

が共通してあったからです。それは「生きていてうれしい」という声だったかもしれません。

戦地で亡くなった兵隊さんは、三百何十万人とも云われます。大半の兵隊さんは、この世に何も残すこともなく亡くなっていきました。でも、天から絵を描くということを受かった彼らだけは違つたのです。生身の命は消えても、作品に込めた命は生き残つて、今私たちと向い合うことができる。彼等の絵には生きて絵を描く喜びにあふれているのです。

全国を歩くうち、彼等の絵は一点一点見てもらうのではなく、そまつな建物でもいいから、ひとつ屋根の下に集めてみよう。同時代に同じ志ざしを持った人間たちの絵を集めれば、一点一点の絵だけではないもつともっと大きな彼等のコーラスのような、うねりのような声が響いてくるに違いないと、だんだんそんな気持になつてきたのです。

無言館は、ともすれば反戦平和の旗じるしのように言われます。新聞、TVでもそう言われます。彼等の絵を見れば、戦争のむごさ悲惨さが伝わり、二度とくりかえ

してはいけないあやまちに気付くのは当然です。しかし、

だからと言って彼等の絵は、戦争によって描かされた絵でもなく、戦争のために描いた絵でもないのです。まして、戦争反対を目的として描いた絵など一枚もありません。彼等は残り時間、ある者は妻を、ある者は恋人を、尊敬する父母を妹を姉を友を、故郷を描いて戦地に立っていきました。残り時間に描いた絵は、濃密な人間関係、濃密な兄弟との絆、濃密な人間の命と命との絆、生きている自分を支えてくれるのは、日常ごくすぐそばにある、何げなく日常を送っている他者の命、そして親や兄弟の命。彼等が描きたかったのは、ことによると、私たちが戦後五〇何年がかりで失ってきたしまった濃密な人間関係、濃密な家族関係、濃密なあの懐かしい日本人の原型の姿。今、私達がどんなに背伸びしても、取り返しのことかない程遠くに失ってきてしまった風景。

彼等が本当に告発したいのは、私たちが五〇何年がかりで、どんなにかげがえのない物を失ってきたしまったか、ことによると彼等が訴えたいのはそのことだったのではないか。そんなことに気づかされてくれる絵が無言

館の壁には並んでいるのです。

無言館は全国三八〇〇名の方々の浄財が手助けして下さいました。お兄さんを戦争で失われた年金五万円暮らしのおばあちゃんば、千円札のシワをのばして、三年間に亘って送ってきて下さいました。お墓をつくるはずのお金を三五〇万円、匿名で送ってきて下さったご家族もあります。四七八三万円というお金が全国の方々から寄せられました。残りのお金は特別ローンで融資してもらいました。しかし私は野見山暁治さんとお会いしなかつたら、無言館と言つ美術館を作らなかつただろうと思います。

八年前まで、戦争のせの字も考えなかつた男が、生意気にも反戦だの平和だのというライトをあびて、しゃべっています。ただ、そんな風に自分を慮めていても始まりません。最近も高知県の方から、同じ満洲で亡くなった画学生の情報が寄せられました。作品を預かってなければなりません。まだまだ無言館の手がさしのべられることを待っている、未発見の画学生が全国にたくさん

居るような気がします。今からでも間に合うものなら、一点一点集めてくるのですが、これからの自分に残された仕事かなと思っています。

よく、ご遺族の方から、「あとひといきで絵がボロボロになってどうなるかと思うとき、あなたが来てくれて、遺族にとって本当にすべり込みセーフでした」と言われます。そうかもしれないけど、私自身にとっても、無言館を作ったことは、すべり込みセーフだったと思っています。六〇歳を超えて、人から注目をあびるこんな尊い仕事を授かったことを本当に幸せ者と思います。

ひとつだけ最後にエピソードを話します。

美術館ができて一年たったころでした。平成一〇年六月二日のことでした。私の美術館の坂を降りたところに、小さな里があり、そこに外科病院があります。そこに自閉症とノイローゼが重なって手首を切った娘さんが三度目の自殺で入院し、命をとりとめて退院してきた日に、お母さんと一緒に無言館にきました。腕に包帯をした娘さんは二時間半画学生の絵と向き合っていたそうです。

そして、一足先以外のベンチに休んでいたお母さんに「お母さん、私、明日から頑張る」と言ったそうです。「三年間、親と口を聞いたことのない娘でした」と感謝のおハガキをいただきました。現在うちの美術館で働いている若者たちは、そのコピーをポケットに入れて働いてくれています。人間はそういう可能性を持つ生き物なのだと考えるだけで素敵です。

戦争の犠牲者でかわいそうだ。戦争さえなければ、のこるだけで見送られるよりは、雲の上の画学生にとつてこの二三歳の今を生きる若い娘さんが「明日から頑張る」と自分たちの絵をみて言ってくれたことこそが、本当の喜びではないでしょうか。

彼等の絵はそれだけのエネルギーを持っている。と、そんなふうに感じます。

貴重な時間をいただいて、ありがとうございました。

アメリカ軍の民家空襲体験

幼年時代

庄 司 達

幼年時代、私の家族は名古屋市内、池下の市電の車庫のすぐ北側に住んでいた。

日本の敗戦も近い一九四五年の冬の夜、アメリカ軍の空襲のサイレンで、自宅前の道路脇に掘って作った防空壕で息をひそめていた。激しい振動が外から伝わってくる。しばらくして外が静かになった。突然父が焼夷弾投下が終わったので、今のうちに逃げようと私達家族をせかせかせた。外で家が燃え始めているので、急がないとこの壕の中へも火が回って来て、逃げられなくなると判断したのだろう。予め、運び込んで置いた荷物や食料の大半は持ち出す余裕がない。外へ出ると自宅は火災が発生していた。すぐ被っていた防空頭巾に、防火用水の水をかけて濡らした。私達家族は先頭を歩く父、乳母車を押し背中にはまだ一才に満たない弟を背負う母と、車内には

三才の三男。私と次男が車の両脇を掴んで火の粉が舞う道路の真中を進む。歩いて行く先の民家が次々と火に包まれて、私の両頬が熱くなった。

アメリカ軍は先ず、B 29爆撃機から250 kg弾を投下して、道路や民家を破壊し、第二波攻撃で焼夷弾を町並みの上に雨のように降らす。町を火の海にしよつとする考えだ。歩いて来た表通りから脇道に入り、土手の続く坂道を通り抜けると、広い電車道が見えた。電柱から架線が幾重も垂れ下がっている。架線のカーブの向こうに見える、消防署の建物までが燃えていた。

電車道を渡った後、どう歩いたか覚えがないが、麦畑のある斜面の畦道に母は毛布を敷き、子供たちを寝かせてくれた。畑の向こうの黒々とした雑木林と民家の屋根の上の空が真っ赤になっていた。名古屋の町が全部燃え

ているのだと子供ながらに感じた。

母と父の話す声で目が覚めた。父が先ほど脱出した、我が家の防空壕の木の蓋に土を被せて来る時間がなかった。火の中をそこに戻ったのだが、既に火が回って中まで真っ黒焦げになっていた、とのことだった。

多くの避難していた人々と共に、町なかの我が家の前に戻った。二階建ての家だったのに、柱も屋根も跡形もなく、瓦礫の山と化していた。近づくとフーンと鼻をつくにおい。台所にあつた一斗缶の中のお米が焦げたにおいと聞かされた。この特殊なおいはその後何十年も、よく似たにおいに敏感になってしまった。そしてその度に、この焼け出された家の跡に佇む自分を思い起こさせることになった。

放心状態の私達に、町内の防空団の炊き出しの人が、玄米の大きなおにぎりを配りに回って来た。生まれて初めて、硬くてつぶつぶのおにぎりを口いっぱい頬張って食べた。更に私達家族は、間もなく再度この空襲に見舞われている。身を寄せていた仲田のお寺である夜、「お兄ちゃん起きなさい」母の大声で起き上がったしてみる

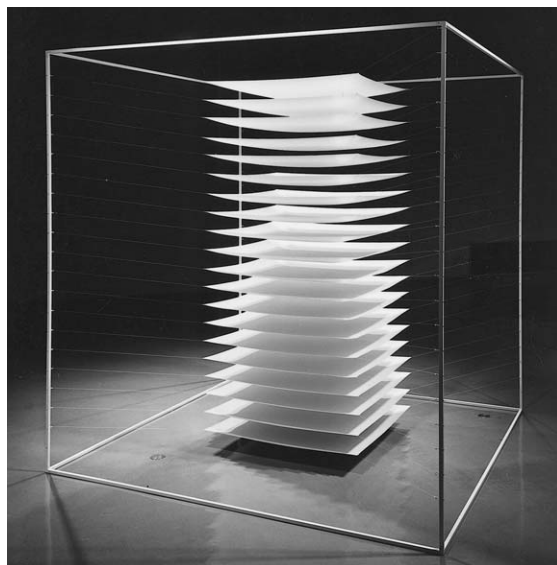
と窓の外、境内の本堂が燃えていた。まだ明けぬ夜の道をどれだけ歩いたのだろう、大久手の父の知人の家の戸を叩いて、一晩泊めていただくこととなった。家人達が私達を見て、少々嫌そうな表情をしているのを、父と母が何処でもいいからと頼むやり取りを、かすかに覚えている。

何日経ったのだろうか。トロリーバスの大きな図体が適り過ぎる車道を、私達子供たちがリヤカーに弟や身の回りの物をのせて、新しい借家に向かって、引いたのを覚えている。多分、今池の交差点から池下の方向に曲がったような気がする。

戦いはまだ終わっていなかったが、この後、もう空襲に遭うことはなく、旧淑徳女学校の前の借家で終戦を迎えることになった。

幼年の子供にとつて、このような体験はあまりにも悲惨である。誰かが死に、誰かが運よく生き延びるという地獄が幼い目の中に焼き付けられる。

そんな中にも、ちよつとした生きる喜びの思い出はある。自宅が焼け出される半年ほど前、京都に住む親戚の



庄司達 (SHOJI satoru)
 白い布による空間 68 - 7 (79再制作) 白色木綿布と糸

誘いで、一ヶ月ほど疎開をした。京都は爆撃されないという噂を父は聞いていたらしい。身仕度をしてあわただしく家を出て、名古屋駅から汽車に乗った。父がゆで卵をやかんの中に忘れて来たと言った。それからずっと、ゆで卵のことが頭から離れることがなかった。

終戦後は食料難のため、何処の焼け跡の土地も空いていけば、近くに住む人々が自由に野菜を育てる畑にしてもらいことになった。父も広い土地を耕した。毎朝、父が手入れをしている畑に来るように言われ、苺、サトウキビ、カボチャ、なす、きゅうり、さつまいも、えんどう豆、などへの水やりや採り入れを手伝った。畑の中でうんちをした尻を、カボチャやきゅうりの葉っぱで拭いたことは、その後度々、自分で同じような経験をするこゝととなった。

近くの焼け跡の庭に三輪車を見つけ、乗って帰ったことがある。自慢気にいつも乗り回していたある日、知らない子供が、「あつ、この三輪車ぼくの」と一緒にいたその子の母親に告げた。ほんの一、二ヶ月の楽しい思い出となってしまい、それからずっと後まで、三輪車が憧れの対象になってしまった。

しかし、この罹災で生き残った私達子供の遊び場が、それまでの空き地から、変化に富んだ焼け跡の塀や空家や庭の大木に移り、遊びの内容がうんと広がり、大胆になったことは皮肉なことである。



シベリヤ抑留の想いで

(三)

竹下重人



四、作業・シベリヤ民主運動(つづき)

ソ連国境、黒龍江を渡ってシベリヤに入ったとき、一
とおりの身上調査があり、イルクーツク第一収容所に入
ってから、詳細な身上調査があった。ソ連側は、地区
(たぶん州毎)に軍の管理部を設け、その組織に政治
部・文化部・労働部・憲兵部(これは別系統であったか
もしれない)があった。

私は、その頃から再三憲兵部に呼び出され、県庁(県
公署といった)に勤務時の職務に関係して、県の総入
口は何程か、その中から何名の労働者を徴用して、関東
軍のために何処で、どんな工事をしたか、県内の農産
物を何万トン強制的に出荷させたか、その代金の何パ

ーセントを強制的に貯蓄させたか、を執拗に尋問された。
中心は第一問にあったようである。通訳が朝鮮系の亡命
者で、日本語が余り流暢ではなかつたので、こちらの説
明が正確に伝えられることは望めない、と考えた私は、
“数字のことは、戦争中に忘れてしまった”で、押し通
すことにした(このことは、三年間一貫した)。憲兵は
机を叩いたり、床を踏み鳴らしたりしたが、調査を受け
る者に対して、実力行使をしないことに驚き、かつ感心
した。

一九四六年春ごろから、兵士の中から、ある種の技能
を持つ者、初めに自動車修理、次いで、電気工事の技術
を持つ者が、抜き出されて管理部に出勤するようになり、

絵を画く兵士（画家も、看板屋も）呼び出されて、プラカードや壁画（レーニン・スターリンの像）を画くことになった。

作業について、このころ説明されたのは、管理部が第一收容所の兵士を労務者としてクイプシエフ工場と契約をし、工場は就労した兵士について、ソ連側労働者と同様に、ノルマによる賃金計算をし、賃金を一括して管理部に支払う、管理部は、それによって收容所の維持管理費用を賄う、という仕組みになっている、ということであつた。その費用は兵士一人当り月四五〇ルーブルであるから、その千五百人分を作業に出る千三百人程で稼がないと収支が合わなくなる。そうなれば、営内作業（例えば理髪、炊事の人員）を減らし、あるいは体調が悪いという兵士でも、作業に出される、という状況になった。体力を要する重労働の場所、ノルマの割合が大きい雑役などの作業場では、能率が悪いと残業を強制されるし、ソ連側の労働係の上官から日本側の隊長や作業班の引率者が文句を言われて、反抗的態度に出るなどのトラブルがでるようになった。

その頃から、軍隊の建制に頼って作業の割当てをするのは合理的ではない、技能のある者はそれを生かすべきではないか、という意見が出はじめた。

私などは、何の技術もなく、体力だけが支えであつたから、雑役とか鉄道運輸の力仕事を当てられるのもやむを得ない、と考えていた。

それよりも、少量の食料で作業に追い立てられ、汚れた衣服のまま、蚕棚のような寝台にゴロ寝をして、翌朝の出勤を待つだけの毎日で、食べ物の話と郷里の思い出話に耽っていたのでは、気分は滅入るし、健康にも良くない。お互いに元気を出して、朝起きたとき、作業から戻ったときは、手足や顔を洗おう、朝は体操でもしようという若い戦友の会が生れた。そうすると兵士の中から、俺は学校の体育の教師だつた、体操なら任せろ」というリーダーが出てくる。作業場では昼休みになると、女工達が唄ったり踊ったりするが、その唄が合唱である。それを見聞きして、「俺達も、軍歌は止めにして、ロシヤの唄でも習おうか」という話をする、音楽の教師であつた人が名乗りを上げるなどで、四六年の秋ころ、青

年の会”が作られた。発足時には、二五才以下の青年三〇名程が、建制を横断し、手を組んだ。幹部候補生である兵士が主力であった。

そのころ、収容所に、日本語の新聞「日本新聞」が配られるようになった。これは、当然に、ソ連側の指導の下で、亡命していた日本人、あるいは兵士の中で嘗て左翼系の運動の経験のある者、などが集められて編集をしたものであり、通常の新聞紙の半分の大きさの用紙を二つ折りにして八ページの誌面であった。初めの頃、“天皇制打倒”とか、“日本軍隊の残虐行為”とかの大文字が目立つだけで、文章は堅苦しいし、兵士らが何よりも知りたいと思っている日本国内あるいは終戦後の満洲の事情については、殆んど情報が出ていないので、読まれないままマホルカの巻紙になっていた。

しかし収容所に配属されたソ連の政治部将校（上級中尉であった）は、几帳面でマニュアル通りに政治教育を進めなければ安心できないタイプの人であった。管理部の政治部主任は中佐だが大学で日本歴史を担当していた歴史学者で、日本のことに相当深い理解を持っていて、

無理強いをしない人であった。いわゆるシベリヤ民主運動もその指導、あるいは監督をしたソ連側の人の人柄、性格によって、大きな違いがあったことに留意して貰いたい。四七年に入って各地の収容所から選抜した青年をハバロフスクに集めて集合教育し、各収容所へ派遣する、という運動方針がとられたが、第一収容所からはそこに派遣された者は無かつたし、そこから派遣されて来た指導者は一カ月で、“ここでは、私の方針は合わない”と、転属してしまった。私達青年の会が中心で排斥運動をしたことも影響があつたらうと思つ。

その頃、作業班を建制によらず、技能者を中心に編成しようという意見が多数を占めることになり、旋盤・フライス盤・鍛冶・鋳物・木工などの工場には、その技能があつて就労を希望する者を中心にしたグループが出勞することになった。“捕虜が何故にソ連の為に働くか”という反論も小さくはなかつたが、私達は、“自分に適した作業をすることが、慰めになるし、全員の生活の維持に役立つ”ことになると主張し、重労働や困難な作業を若い者が引き受けるから、全員が体の状況が許す範囲

で頑張つて貰いたい、と訴えた。

自分の得意な技能で職場を選んだ兵士たちは、どこの職場でも女工達の成績を抜き去つて優位を占める様になつた。仕事仲間との友好関係も生れた。イルクーツク第一收容所は、シベリヤ全体の中では、生活環境が最良の部分にあるという幸運に恵まれた訳である。私達青年の会の仲間は、溶鉱炉と鑄物工場などの作業を受け持った。当時のクイブシエフ工場の溶鉱炉は、鉍石や屑鉄を手で投げ込むという古い方法のものであつて、高熱の作業場で体力を消耗する作業場であつたが、青年たちは頑張つた。それに続く鑄物工場では、鉍役液を容れたバケツトを吊るした天井走行のクレーンを運転するのは女工、下でそれを誘導するのは日本の兵士、騒音の中で、白い手袋を着けた手の合図で、バケツトを正確に鑄込み口に誘導するためには、コンビの気合の一致が必要である。そのため、前述した三交代制の流れでもその組み合わせは変えられなかつた。あるコンビが仲良くなりすぎて、前半夜勤務で残業した後、兵士が宿舎に戻らず女工の部屋に遊びに行つて、泊まつてしまったため、脱走したので

はないか、大騒ぎをしたこともあつた。

四七年の正月には、炊事班が日頃の支給食材中から選んで、少しずつ貯めていたものに工夫を加えて、おせち料理もどきのものを作つてくれたりしたので、階級章を外し、軍隊的呼称をやめた兵士達は、望郷の想いは耐え難いながらも、幾分の明るい一日を過した。青年の会も青年部と名を改めて、一五〇名近いグループになつていた。日本新聞の配布部数も増え、内容も充実（一方面的はあるが）して来たところで、政治部の上級中尉は運動の拡張を図りはじめた。兵士の中から高等教育を受けた者を選び出して、勉強会を組織せよ、と言つ。スターリンが編集したという「ソビエト共産党小史」を読む会、経済学・哲学を研究する会、ロシア語を勉強する会などである。

テキストは日本新聞。私も上級中尉に呼ばれて、お前は経済学部出身だが、リカードを知っているか、マルクスはどつたという質問を受けた。通訳は、前にも述べた亡命朝鮮人であつた。正確な議論が出来る訳はないので、“読んだことがある。労働価値説を初めに説いた人と完

成した人だ」と答えたら、ハラショー、お前は経済学の解説をやれ、ということになった。昼間の作業から帰った兵士に呼びかけても、中々近づいてくれない。しかし、私自身興味があつたので、週に一回程、夜に読書会を開いた。

そのころ、收容所の内部生活を自治会で運営するように改めようと、これは明らかにソ連側政治部からの指導があつたようである。第一收容所では既に作業場別の編制で動きはじめていたので、軍隊組織の解体に甚だしい反対は無かつた、将校も、若い人達は兵士と同じように作業をするようになっていた。そこで自治会の中央要員五名を選挙で選ぶことになった。選挙の方法はソビエト式。選出する委員の数だけの候補者を各団体あるいは組織が選出して、その候補者名を列記した投票用紙に、不適任と思う者に×印をつけて投票する、という我が国の最高裁判官の選挙と同じ方法である。私は青年部から推薦された候補者として名を並べ、信任の得票があつたが、憲兵部から、あれは反ソ連的國家主義者であるから、民主的自治会の委員に相応しくない、とクレームがついて

委員になれなかつた。自治会は、委員長・教宣部・文化部・生活部・作業部を設けて運営されることになり、青年部は自治会とは別の組織として残つた。溶鋳炉と鑄物工場の仲間は元気に働き続けた。

第一回選挙で選ばれて委員長になつた兵士（幹部候補生）が、管理部に出頭した帰りに酒に酔つて戻つたという事件があつたりして、ソビエト式の選挙は日本人には納得できない、やはり複数候補者を立てて直接選挙をやるべきだ、ということになり、第二回の選挙は立会演説会も開いて、討論をした。私も溶鋳炉から帰つたままの汚れた顔で演壇に立ち当選した。青年部を自治会の中の組織として青年部長ということになった。作業場はそのまま続けた。

そのころ、管理部の政治部担当の中佐が市内の工科大学の学生を連れて溶鋳炉の捕虜の作業見学に来た。炉の中の屑鉄などが融けて鋳液になり、鑄型に鑄込まれるまでを、見るため工場内に泊り込みである。この辺りの徹底振りには感心した。学生たちと、片言の英語とゼスチャーで語り合つてみて、彼等に対する教育が唯物論に徹

底している、というか、それだけしか教えられていない、のに驚いた。指導に来ていた中佐が私に、「ロシア語をもっと勉強しなさい、英露の小辞典を貸してやる」と言ったが、英語も良く分からない、中露辞典があれば、その方が欲しいと答えた。一・二週間後に小さな中露辞典を持って来てくれた。これは大変有難かった。少しロシア語での会話の能力が進んだ。

自治会の文化部の企画として、演芸会をやることになり、日曜日に第一回を催した。青年部の若い人はロシア民謡などをロシア語で斉唱したりした。ロシア人の重厚な合唱は、まだ練習ができていなかった。

お年寄り？の人達の中に、旅役者の一座を持っていた人や、映画会社の脚本部にいた人などがあって、芝居の話も歓迎された。役者の選び出し、大道具・小道具・衣装などの調達の苦労などは、加藤大介の「南の島に雪が降る」に書かれたこととよく似た状況が、シベリヤでもあったのだと理解していただきたい。

兵隊さんのお芝居といえば、先ず国定忠次、吉良の仁吉などである。前記の座長さんは殆んど文字は読めない

人であったが、立廻りや時代劇の所作はたっぷりと仕込んでいて、一生懸命指導をしてくれた。一月か二月に一回、全員が観劇できる日を設けて貰って上演した。その日には、炊事班の努力で、小麦粉が高梁粉で拳大な蒸しパンを作り、一人一個ずつ配食されたりして、兵士の喜びようは大変なものであった。その歓迎と熱烈な応援に応えるため、演劇グループは常に新しい芸題を創り出し、その稽古に大変な努力をした。

ところが、政治部の中級中佐から、お前達は何時まで刀を振り回す芝居ばかりやってるんだ、という忠告があった。よし、それなら現代劇をやるう、ということになったが、資料や文献がある訳でもなく、入手の方法も無いので、全員に呼びかけて、トルストイを読んで記憶している人数名に集まって貰い、カチューシャ物語を再構成し、映画会社の脚本部にいた人に脚本に仕上げてもらって、稽古を始めた。女形の役を演じる兵士を探し出して承知させるとか、女子工員の寮に洋服を借りに行くとか、大騒ぎをして、上演に漕ぎつけた。好評であった。それから約一年、この演劇グループは、月並みながら、あ

かつき劇団」と名乗り、テーマソング（第一收容所から復員して高校の音楽教師になった人が、市民交響楽団を結成していた、昭和四三年ごろNHKで「杏花の詩」と題してその歌の合唱と收容所の想い出話を上演したことがある）も作り、演技も本当に上手くなっていた。みんな、作業を終わった後の稽古である、中心は青年部の若者たちであった。

四七年の秋、第一收容所からも一五〇名程が帰国することになり、委員長と教宣部長も帰国した（このことは次に詳しく書く）。私は青年部長を若い人に代わって貰って、教宣部長に移った。

戦後のソビエトでは、四六年の春には主食のパンが自由販売となり、四七年には貨物単位の切換（小額の現金・預金は、同一金額で新ルーブルに切り替え、中程度は三分の二・高額は三分の一に切り替え）に成功し、市民生活もかなり安定し、豊か（それでも帰国して驚いた日本の町の表面的な豊かさとは、まだ比べることでできない程度ではあったが）になり、工場の雰囲気も明るくなっていった。

溶鉱炉にも、電気炉が附設されたり、圧延の工場にも、手で引つ張るのではなく機械で作業するなど、少しずつ現代化しつつあって、兵士の作業も、やや楽になった。四七年秋に一部の帰国が実現したことで、俺達も何時か近いうちに”という希望を持って三度目の正月を過ぎた。

戦後早い時期に、ソ連は刑罰のうち死刑を廃止した。日本新聞は、教育刑主義を基調とする人道的政策であると讃えていた。一九四七年春ごろから、イルクーツク地区の農場や道路建設作業にヨーロッパ・ロシアから送られた囚人が見られた。

收容所の通訳（入隊前は領事館勤務）は、ソ連の刑法では、国家に対する反逆の罪は死刑と定められており、ヨーロッパ・ロシアがナチスドイツに占領された四年間に、占領行政に協力した市町村長や警察官・御用商人などは死刑になる筈であった。しかし、その数が余りに多いことと、戦後シベリヤ開発のための労働力が不足していたので、その対策として死刑廃止。シベリヤ流刑が復活しただけさ、と皮肉っぽく解説してくれた。ロシア帝

政時代から、シベリヤの開発に流刑者が利用されたことは、私達も知っていた。

帰国後一九五〇年に、ソ連邦最高人民会議幹部会の決議で、死刑が復活したことを聞いたとき、私は、あぁウクライナ住民の裁判は終わったのだなぁ、と思った。

ワイプシエフ工場は国营である。その製品はもちろん、半製品・原材料もすべて国有財産であり、国有財産を故意に壊したり、盗んだりすることも重罪とされている。そこで面白かったのは、収容所の環境整備の苦労との関係である。ソ連の軍医は、炊事場の衛生状態の改善、たとえば調理台や配膳室を清潔にせよ、と口やかましい。しかしそのための資材については何もしてくれない。覚悟を決めた炊事班が、各種材料が手に入れられそうな職場の戦友にも協力を求めて、セメント・鉄材・木材などを持ち出し、兵士の中の職人の腕を借りて、炊事場をコンクリートの床に、調理台を鉄板張りに改造した。巡視に來た軍医は、ハラショーと褒めたが、材料のことには一言も触れずに出ていった。

政治部の将校は、収容所内に壁新聞を掲示せよ、と要

求する。日本新聞の切り抜きや、連載される哲学、経済学などの解説を、もつと判り易い文章に書き直して記事にすることなどを要求するが、インクやペン、用紙のことは知らぬ顔である。工場の廃棄物の中から使えそうな紙を探し出して、壁新聞を貼った。

ある時、私は倉庫で裏が白い用紙を見付けて一〇枚程をシューバのポケットに隠して持ち帰り、壁新聞の編集スタッフに渡したことがある。その用紙が工場の決算書類の用紙であることがバレて、私は憲兵に呼び出され、
“工場の原価計算を探ろうとしたのではないか”ときつく調べられた。この憲兵と私は相性が悪く、その前にも
“お前はクイプシエフ工場の経営能力が悪い”と、兵士の間言い振らした、と叱責されたことがある。そんな批評をしたことは事実であるが、それを反ソ宣伝だというのである。“見解の相違だ”ということで物別れになったが、しばらくの間、気分がわるかった。しかし、その用紙の裏を使った壁新聞を破れとか取り外せとはいわなかった。

五、ダモイ（帰国）

シベリヤに入った初めから、兵士の関心は、帰国できるのか、それは何時か、ということだけであった。管理部の將校に尋ねると、必ず「スコラ（もうすく）」という答えが返った。四七年春ごろ、管理部の者から、ダモイ（帰国）の基本方針を次のように説明された。

健康を害していて、病人に適した環境で療養に努めるべき者、優秀な労働者として、ソ連の戦後復興に協力した者、アメリカの帝国主義に制圧されている日本人の解放に尽力して貰いたい者、という優先順位で選ぶ。

要するに病人、怪我人は要らない、残っていてよく働けば、早く帰す、帰国後、反米、親ソの行動を約束すれば早く帰す、ということだ、と兵士は理解した。ソ連側は、各職場の長に対して優秀労働者を推薦させた。そして第一回の帰国者は、その時の傷病者全員と、誰が見ても頑張って働いたと見られていた兵士の中から二・三名、自治会の役員と理由は分からないがソ連側の指名によると思われる者数名によって編成された。私と一緒に働いていた青年部の六名も、作業優秀者として、帰国

者の名簿に含まれていた。政治部將校は、良かったな、と喜んでくれたが、その夜早速、憲兵からの呼び出しがあり、最初の面会の時に尋ねた三つの問題の答えを思い出したか、と尋ねられた。そのころには日本人の通訳が付いた。私は、作業や自治会のことや忙しくて、昔を思い出す暇もありません、と答えた。翌朝、私の名は帰国者名簿から外されていた。この時、自治会の委員長と教宣部長、それに溶鉱炉の私のグループの青年が帰ったので、私は教宣部長を引き受けたが、溶鉱炉の作業は止めにした。数日後、監督が、お前が残ったのなら新しいグループを作って、働きに來い、と言いに來て、管理部とも話をつけてくれたので、また溶鉱炉作業班を作って復職した。

その頃には各工場での作業環境も、それなりに改善されて、トラブルも少なくなった。一つの工場で、日本人の労働についてノルマ計算し、管理部に支払い、それが収容所の維持費に充てられる。ということは前述した。収容所の維持管理相当額を留保して余裕があれば、兵士のうち高い労働成果を上げた者に給料を支払う（但し

一月五〇ルーブルを限度とし、超過部分は君たちのために預金しておく、という説明付き）ことになった。その賃金計算に納得できない兵士がいたのである。管理部の将校に工場事務室まで出張して、伝票を点検して貰った結果、やはり不明確なところがあるから検算をさせてくれ、と申し入れ、日本側の経理下士官に再計算をさせた。下士官は、驚いたことに、小型の算盤をまだ持っていた。その計算の結果を工場側に示すと、二度・三度ソ連式の計算道具で検算をして、やはり日本側の計算が正しいことを承認し、賃金計算を修正することを約束した。その後、その工場の日本人の作業伝票の計算は日本人に任せられた。

前述のやり方で給料を貰うことになった私や仲間達は、その大部分を自治会に提供して劇団用の衣装や道具の調達に役立ててもらった。日本では、現在でも、シベリヤ抑留中の労働者に対して賃金を支払うよう政府に要求する運動が続いている団体（全抑留協という）がある。前述の経緯があるので、私たちは無償で働かされたという気持ちが無く、この運動には加担しないで過した。

四八年の五月一日に、管理部の政治部中佐が記念講演をするが、通訳人の通訳では迫力が足りない、教官部長であるお前が通訳をやれ、と言う。私が、作業言葉ぐらいは判るが貴官の講演の通訳はできない、と断ると、彼はニヤリとして、「大丈夫、芝居をやるう」と言う。講演の原稿を予め通訳人に翻訳させて文章の段落ごとにマークを入れておく、その一節を口演したら、脚元で君に合図をするから、その翻訳を元氣よくしゃべれ、という打合せをして、講演を実施した。それに続く演劇班のお芝居を見る期待に心浮かれていた兵士は、私たちの力ラクリには気がつかなかった。

その年の七月にも帰国者が出た。私達自治会委員にも帰国の内示があった。委員の中から、このような選ばれる方が悪い。後任の委員も仕事やり難い、俺達も何時かは帰国できるのだから、今回は残ることにしようではないか、という者があった。そのような訳で私を含めて三名が帰国を辞退して留任した。その年の九月の帰国者選出の場合も、同じことで対応し、同年一〇月第一収

容所が閉鎖される時に、残留者全員と一緒に帰国することになった。このとき私は、自治会事務局で作っていた第一收容所に滞在した兵士の名簿（氏名、生年月日、日本での連絡先を記録した程度のもので）を持ち帰ろうとした。イルクーツクの政治部将校は、よろしいと言った。ナホトカの仮收容所の係官は、文字、写真は一切携行不可という指示を変えない、日本兵が身につけていたお守りでさえ、不可という。私はこの名簿の大切さを主張して何回も許可を要求したが、先方は、それ程大切なら、お前が信頼する兵士を五名運んで、名簿の内容を記憶させる、と言う。迎えに来た日本の船を目の前にして、気もソゾロの兵士には無理な依頼であるが、そうする外は無かった。私達六名で、その名簿をバラして一生懸命読んでから、帰国船に乗った。途端に日本の復員局の職員が紙を配って、残っている仲間の名前、年令、出身地、連絡先など、一部でもよい、記憶しているだけ書き出してくれと言う。あの名簿の持ち帰りを許されなかったことが、本当に口惜しかった。

帰国船高千穂丸には、第一收容所の一〇〇〇名と、他

の地区からの五〇〇名（この部隊は、厳然と建制を守り、階級章を付けていた）とが合流した。ナホトカ港を出た第一夜、甲板集会が開かれ、復員局の職員から国内事情の説明がされたが、それは日本新聞に報道されたところとは、だいぶ違っていた。その五〇〇名の集団の中から、自治会グループを糾弾せよとの動議が出され、第一收容所の兵士の中にもそれに同調するものがあつて、両集団の中の自治会委員は壇上に呼び出され、厳しい言葉で罵られた。しかし、第一收容所の青年部の諸君が、演台の周辺を固めてくれて、暴力事件にはならず散会した。

舞鶴に到着したときに、私は占領軍の事情聴取に対して、反抗的であるということで、若干のトラブルがあり、第一收容所から先に帰国した戦友が私の実家に宛てて「竹下は元気で働いているが、ソ連が気に入って、帰国しない、と言っていた」という手紙を出してくれていることが、地方新聞に書かれていたりして、復員後の仕事探しに、占領軍からの邪魔が入った。しかし、これは抑留の後日談であるから、この稿では詳述しない。（完）

あの戦争のことを、民族全体が忘却することとは、間違っているし、とても許されないことだと私は思う。

あの戦争は、民族の歴史の上で、最大の愚行、最大の不幸として国民が永久に記憶すべきことで、いわば負の遺産ともいっべきものなのだ。